

日本語の擬声語と擬態語研究

— インドネシア語と対照して —

セノ バスコロ

一 はじめに

インドネシア大学に入って日本語の勉強を始めて、ちょうど4年間経ちました。テキストは色々あるのですが大体標準語の日本語ばかり学習しているので次のような例文がよく出て来ます。「～は～です」「～の上になにがありますか」「～の上になにかありますか」「～をしながら～をします」「～をしたり～をしたり～をします」「～ってもいいです」「～ってはいけません」「～や～や～などがあります」「～では～が一番～です」などです。そして、1993年10月に日本へ来る機会があり、今まで広島大学で研究生として勉強しながら日本人と会話をする機会がたくさんありましたが日本人の話しを聞く時、なんとなく分からない言葉がたくさん出て来ました。特に擬声語・擬態語がよく使われていますがよく分かりません。インドネシアで日本語を勉強した時はそういう言葉は教えられないし、インドネシア語におそいう言葉はほとんどありません。という訳で、私は擬声語と擬態語に興味を持ちました。今回のレポートで日本語の擬声語と擬態語を研究し、インドネシア語と対照しようと思います。それによって私の擬声語と擬態語研究が外国人のために、あるいは擬声語と擬態語に興味を持っている人のために役に立てば良いと思います。

二 日本語の擬声語・擬態語とは何か

どこの国の言葉でも言語的な特徴点が常にあり、日本語はその一つに次のような擬声語と擬態語と呼ばれているものがあります。

1. そとはしとしと雨の音がしている。
2. 見るとほろほろ涙をごぼしているんです。
3. 一人でとことこどこへも行ってしまうので、母親は目が離せない。
4. あそこまでてくてく歩いていった。
5. 老人夫婦が重そうな荷物をかかってえっちらおっちら急坂を上がっている。
6. 私はそのままそこへ座ってたださめざめと泣きました。
7. ほったしたのか、すやすや眠っていた。
8. はじめてのデートだというので、彼は朝からそわそわしている。
9. 仕事がうまく行かぬ、家族はつぎつぎに、病気にするので、くさくさしているところだ。
10. 雨がばらばら降って来たから急ごう。

(2)

上の文例を読んでも、私はすぐ理解することができない。やはり日本語を勉強している外国人に聞いても上の例文を理解することは難しいようである。それは当然だろう。この難しい言葉は日本語の擬声語と擬態語という呼ばれてものである。

とにかく擬声語・擬態語とは何か。大坪併治「擬声語の研究」にはつぎの分析がある。擬声語は音声の持つ特殊な情感を利用、端的に事物の状態を描写する言葉である。ここにいう「音声」とは私達の音声器官によって作られ、言葉に用いられる声のことである。ある音声を聞いて、大小、明暗、軽重、粗密、硬軟などの印象を受けるのは、その音声自体が、私たちにそう感じさせるものを持っているためと考え、これを「音声の持つ特殊な情感」という。「端的」とは「直接的」といっても良い。つまり「サクラ」という音声と、「桜」という植物との間には、直接的な繋がりはない。いつ、だれかが決めたか分からないが、しだいにそういう約束が成立して、「サクラ」といえば、「桜」を連想するようになっただけのことである。しかし、桜の散る状態を表すハラハラ、ヒラヒラ、ヒロヒロという擬声語は、その音声の持つ情感がそのまま言葉の意味となっていて、両者の間には直接的な繋がりがある。「ハラハラと散る」「ヒラヒラと散る」「ホロホロと散る」といえば、桜の花の散る状態が、それぞれ異なった印象を持って、端的に解させるのである。

次に五味太郎の「日本語擬態後辞典」には別の説明がある。つまり擬声語・擬態語を文法的に3つ分類している。

「A」副詞タイプ

活用がなく、おもに連用修飾として用いるもの。以下の3種類がこええに含まれ。

1. 一般に動詞と呼ばれているもの。末尾に「と」を伴わないで、そのままの形で用いる。

例 いよいよ出発だ。いちいちうるさい。

2. そのまま、あるいは末尾に「と」伴って、副詞として用いるもの。

例 おずおずと差し出す。ほかほかと温かい。

3. 末尾に「と」伴って、副詞として用いるもの。

例 ろうろうと歌う。もんもんと悩む。

「B」変動詞タイプ。

末尾に「する」を伴ってサ行変格活用型の複合動詞として用いるか、あるいは格動詞「と」+「する」を伴って用いるもの。

例 うきうき(と)して。ばざばざ(と)した髪。うじうじするな。

「C」形容動詞タイプ。

末尾に形容動詞の活用語尾を伴って用いる。ただし、後ろに名詞がくる場合(連体形)には、形容動詞の活用語尾「-な」のかわりに、「-の」用いる場合が多い。おそらく、「-の」は「-な」の音便形だと思われる。

例 意見がばらばらだ。へとへとに疲れる。あつあつのふたり。

擬声語・擬態語は英語で翻訳したら「onomatopoeia」と呼ばれているものにあたります。成美堂の「現代言語学辞典」によれば「onomatopoeia」つまり、擬声語と擬態語は動物の泣き声や水の流れる様子など、自然界の音を模倣したり、それを象徴的に再現すること、またそのような語を指す。擬音語ともいう。擬声語と擬態語は、自然の音を模倣するものですから、音と意味がある程度の関連をもつといえるが、言語によってその表す方が異なる。例えば犬の鳴き声は、日本語では「ワンワン」、英語では「bow-bow」、フランス語では「ouá-ouá」である。さらに、特に日本語では、ニコニコ、ソワソワ、スベスベなど、実際には音を伴わないのにあたかも音を発しているかのように人や事物の状態を描写する語が多く、これらは擬態語と呼ばれている、擬態語は日本語の表現力を非常に豊かにするもので、例えば、水の流れる様子を表現する場合、「チョロチョロ」「サラサラ」「トウトウ」「ゴーゴー」など、様々の表し方があって便利である。このような日本語の生き生きしたニュアンスを外国語にぴったり翻訳することは、なかなか難しいとよく言われています。

また、次ぎのような分析があります。これは「日本文法大辞典」の説明である。この本では擬声語と擬態語の説明を別々にしている。まず擬声語は「物の発する音や動物の泣き声をまねた語。音を伴わないたんなる状態の描写を擬態語といった区別するが、一般には広義に総称として用いる。オノマトペ(onomatopoeia)、象徴語、写生詞、擬音語ともいう。舌打ちなどの表情音や特殊な音の模写は別として、擬声語は音節の組み合わせ方が、比較的規則的な体系をなしている。例えば、カ行音ではじまるもののうち、カンカン、カタカタ、クンクン、クツクツなど、一定の子音の組み合わせに、一定の母音を与えて音の象徴する感じを違ったものになっている。このこたは擬態語でも同様であるが、ポッカリ、ザンブリなどは、表現上擬音の区別が付けがたい。文法上擬音の場合には「と」伴い、また伴わずに連用修飾(副詞)として用いられる。ガラガラのように、おもちゃの名として転用される時は、アクセントの型も変わる。現代の漢字ひらがなまじり文では、擬声語はかたかなで書かれたことが多く、擬態語はひらがなも用いられ、表記は一定していない。」次に擬態語には、次のような説明があります。「音には直接関係のない状態や身ぶりなどを描写する擬声語の一つ。ノソリ歩く、テキパキ片付ける、スッキリするなど。擬容語ともいう。狭義の擬声語との区別があいまいで、「ガラガラ声」などは中間的である。日本語は印欧語に比べて擬態語に富み、感覚的に相手に訴える話し言葉や作文などに使われる。現代語では文法上、単独で連用修飾語(情感の副詞)となるほか、「だ」(な、の、に)を伴って形容動詞に、「する」複合してサ変動詞にすることがある。」

以上、色々な本から擬声語と擬態語について、意見を集めてみた。これらを参考にして、私は擬声語と擬態語に対して、次ぎのように考えました。擬声語と擬態語は日本語

(4)

の特長だと思います。日本語の擬声語と擬態語と呼ばれているものはたくさんあり、その一つ一つの言葉が豊かな印象、ニュアンス、または意味をもっている。そして、そういう言葉の誕生の原因はたしかに環境の影響であり、我々の耳に聞こえてくる音、例えば、雨の落ちる音、風の吹く音、動物の泣き声、人の歩く音などを我々の音声器官で模倣するために、擬声語と擬態語と呼ばれているものを作り出しました。どこの国の言葉でもそのような言葉が存在すると思いますがただ、日本語では、そういう言葉が増大しているのが大きな特色になっているのだと思います。

擬声語と擬態語は日本語の文法でいうと主に副詞にあたります。副詞は山田孝雄によって、文法的に3つに分類されている。「日本文法辞典」では次ぎのように説明してある。

A. 程度副詞

一般化した副詞の名称の一つ。それ自身は属性を表すことなく、情感性の属性の程度を示すもの。情感の意味を持つ用言および情感副詞の上において、その属性を限定する機能をもつ。「かなり遠い所」の「かなり」は遠さの程度を示す。このように属性を限定するゆえに、下の語がどのような用法に立っても用いられる。例えば、「かなり遠い」「かなり遠く見られる」「かなり遠ければ良い」のように。程度副詞は、形容詞、形容動詞の前に立つことが多い。例・いと美しい／はなはだ静かなう夜／もっと早く歩け／ごく近い所／よほど苦しいらしい／きわめて健康だ／ちょっとおかしい／たいへ疲れた。また方向・場所・時間・数量など、空間的、時間的にある広がりをもった体言の上ついでその広がり程度の程度を限定することがある。例えば、ちょっと右へ寄れ／もっと遠方から来た／ずっと昔の話し／やや東の方。

B. 陳述副詞

叙述の副詞・呼応の副詞とも。述語の陳述のしかたを修飾限定する機能を持つ。「日本文法学概論」によれば、いわゆる副詞（語に依存する副詞）を大別して属性の装定をなすものとの二つに分け、後者を陳述副詞とする。これは、下にある用言の表す属性には関係なく、その陳述が断言的であるか、躊躇的であるか、否定的であるか、あるいは条件的であるか、それは陳述の態度をあらかじめ拘束するものだとする。陳述副詞の例は次ぎのような言葉である。かならず／ぜひ／きっと／けっして／ちっとも／なにとぞ／どうか／どうぞ／まるで／ちょうど／もし／たといなどである。

C. 状態副詞

状態副詞はそれ自身事物の属性・情感を表わし、用言の持つ動作性概念を限定する。「しばし休む」「すっかり出来上がる」などがこれである。「がやがや」「がらがら」のような擬声語、「びっさり」「しとしと」のような擬態語が多い。また形態的には、「いよいよ」「ますます」「こもごも」のような疊語、および以上のものに「と」「に」がついたもの（例えば、「じみじみと」「たちまちに」）が多い。

以上の説明を読んで、日本語の副詞分類がわかるようになりました。副詞の一つの

情感副詞と呼ばれているものあり、この情感副詞、いあば情感を表す言葉であり、擬声語と擬態語もは主に日本語の文法で情感副詞に含まれてことが分かるようになりました。

三 インドネシア語と対照して

擬声語と擬態語のような言葉はどこ国の言葉でも存在すると思いますが、インドネシア語の場合は擬声語と擬態語のような言葉があるかどうか、まだはっきり分かりません。そこで、これから日本語の擬声語と擬態語をインドネシア語と対照しようと思います。まず日本語の擬声語と擬態語の例文を集めて、インドネシア語で翻訳します。インドネシア語で翻訳することができるかどうか確認して、同時に、インドネシア語の擬声語と擬態語を分析したいと思います。

A. まずはインドネシア語で翻訳できない場合擬態語。

1. 少年は小川であぶあぶがいている小犬を助けて家へ連れて帰った。

Anak itu dengan sekuat tenaga menolong anjing kecil disungai dan membawanya pulang.

2. 初めての帰省で、彼は足どりもがるいそいそと駅に向かって。

Ini adalah kepulangan yang pertamakali, kaki dia seperti selalu ingin menuju stasiun.

3. 電車がのろのろ走るから、乗客はいらいらにばる。

Karena kereta jalannya lambat, penumpang jadi marah.

4. 花咲き鳥歌い、春はなんとなくうきうきする季節です。

Bunga berkembang burung bernyanyi, entah kenapa musim semi adalah musim yang di nanti-nanti.

5. ヘリコプターから、東京ドームの中を見たら人々は虫のようにうじゃうじゃ集まっていった。

Dari helikopter, orang-orang yang ada didalam Tokyo dome terlihat seperti serangga yang sedang berkumpul.

6. 初孫だからね、まだだめと言われても抱きたくてうずうずするのさ。

Karena ini cucu yang pertama, walaupun dikatakan belum boleh dipeluk, rasanya sudah tak sabar ingin memeluk.

7. 私はその犯人をうっかり見てしまった。

(6)

Secara tidak sengaja saya melihat penjahat itu.

8. 海に沈んでいく夕日の美しさに、ただうっとりながめていた。

Melihat keindahan matahari sore yang terbenam dilaut, membuat lupa hal yang lain.

9. 熱が高く、昼も夜もうつらうつらしている状態だった。

Demam meninggi, siang malam selalu dalam keadaan susah tidur.

10. 部屋があまり静かであたたかいので、ついうとうと眠ってしまった。

Ruangan ini sunyi dan hangat, tahu-tahu saya jadi ngantuk.

11. 目に見えないけれど、ここにはばいきんがうようよしているんだよ。

Walaupun tidak kelihatan mata, disini banyak berkumpul kuman-kuman.

12. うらうら日の輝る時は、ピクニックが一番いいですね。

Pada saat matahari bersinar cerah, saat yang paling baik untuk piknik.

13. 夜になると、野良犬がうろうろして、困るんですよ。

Begitu malam tiba anjing-anjing liar itu berkumpul. Menyusahkan.

14. 「どっちが正しい答え？」と先生に質問されて生徒はおずおずと自信のなさそうに右の数字を指す。

「Mana jawaban yang benar」 tanya guru kepada murid, murid itu dengan gugup menunjuk bilangan yang ada disebelah kanan.

15. 大地震があるかもしれないという話に、住民は夜もおちおち眠れなという。

Karena dikatakan akan ada gempa besar, penduduk jadi tidak bisa tidur dengan tenang.

16. 私の主人はおっとりしているから、そんな仕事はできないかもしれない。

Suami saya orangnya pendiam mungkin tidak bisa menjalankan pekerjaan seperti itu.

17. 赤ちゃんが夜中に急に高熱を出したので、若い母親はおろおろして、何度も医者に電

話をかけた。

Karena bayi tiba-tiba demam ditengah malam, ibu muda itu kebingungan terus-menerus menelpon dokter.

18.目のぎょろぎょろした、恐ろしいそうなおやじだ。

Matanya melotot, benar-benar orang yang menakutkan.

19.秋の夜空に満天の星がきらきら光っている。

Pada waktu musim gugur, semua bintang dilangit bersinar dengan indah.

20.夏の太陽がいつもきらきら光っている。

Matahari pada musim panas selalu bersinar dengan panas.

21.昼日中からぐーすか寝ていて、いつ仕事するんだね。

Dari siang tidur dengan pulas, kapan kerjanya yah.

22.一日中買い物にまわって、おなかがすいて体もくだくだだ。

Seharian penuh keliling dan belanja, perut jadi lapar dan badan capek semua.

23.2DKというのは夫婦に子供一人で、きちきちだからね。

Ruangan ini hanya 2DK saja, untuk suami istri dan satu anak tentu tidak cukup.

24.昨晩はぐっすり眠ったので、今朝は気分がいい。

Karena tadi malam tidur dengan nyenyak, pagi ini perasaan sangat segar.

25.サッカーを20分ぐらいやるとぐったり疲れてしまう。

Main bola cuma 20 menit saja, sudah capek banget rasanya.

26.あの子、目がくりくりしていてとてもかわいいね。

Anak itu matanya bulat seperti bola, benar-benar cantik.

27.地球がぐるぐる自転しながら一年かかって太陽の辺りを回るわけです。

Bumi sambil berputar pada porosnya, berputar mengelilingi matahari selama satu tahun.

(8)

28. あの大きな鳥が空にくるくる飛んでいる。

Burung besar itu terbang berputar-putar dilangit.

29. こんなざーざー雨に出かけないほうがいいじゃないか。

Pada saat hujan lebat seperti ini lebih baik tidak pergi kemana-mana.

30. 若いけどきびきびと仕事を片付けていって楽しい青年だ。

Walaupun masih muda tetapi selalu bersemangat dalam bekerja adalah masa muda yang menyenangkan.

31. こんな時間なのに、車がすいすい走る、変と思わないか。

Pada jam seperti ini mobil bisa jalan dengan lancar, tidak seperti biasanya yah.

32. 日光とちょうどよい気温に恵まれ、花草はすくすくと伸びていく。

Dengan sinar matahari yang baik dan suhu yang cukup, bunga rumput itu tumbuh de ngan subur.

33. 九時すれすれに会社に着いた。

Jam 9 kurang sedikit saya tiba dikantor.

34. アーゲンセールがあるので、朝から人々あのデパートの前にぞろぞろ並んでいた。

Karena akan ada bazar, dari pagi orang-orang udah ngantri didepan toko itu.

35. 子供に囲まれた猫は不安そうな鼻や耳を動かしてきょときょとした目つきをしている。

Kucing yang dikelilingi anak-anak itu, hidung, telinga dan matanya bergerak-gerak ketakutan.

B. 次はインドネシア語で翻訳できる擬態語の例文。

1. いつもそんないじいじした態度はいやだ。

Saya tidak suka dengan sikap yang selalu ragu-ragu.

2. 男のくせにうじうじしていないで、いやならいやとはっきり態度をさせたらいいでしょう。

Sebagai laki-laki jangan bersikap plin-plan, kalau tidak suka perlihatkan sikap

yang jelas.

3.何をぐすぐすしているのだ、急いでやれ。

Kenapa lelet begitu, cepat kerjakan!.

4.あの夫婦はぎずぎずしているんですよ。

Antara suami istri itu hubungannya dingin lho.

5.せかせかした女で、夫婦しんみり話し合う時間なんてないじゃないか。

Wanita yang selalu grasa-grusu, mana mungkin punya waktu bicara dari hati ke hati dengan suaminya.

6.はじめてデートだというので、彼は朝からそわそわしている。

Karena ini adalah pertemuan yang pertama kali, dia sejak pagi deg-degan terus.

7.あの人はデパートの前に立って、きょろきょろして、変な人だ。

Orang itu berdiri didepan toko, kemudian celingak-celinguk. Mencurigakan yah.

8.春風がそよそよと花草の上を吹きわたります。

Angin musim semi bertiup sepoi-sepoi diatas bunga-bunga rumput.

9.こんなだくだく流れる汗は始めてだ。

Baru pertama kali saya keringatan basah kuyup seperti ini.

C. 最後にインドネシア語で翻訳できる場合擬声語の例文。

1.起き出して窓をあげ、空の向かってあーあと大あくびをする。

Jendela itu saya buka, kemudian menghadap kelangit dan menguap huah

2.鳥ががーがー鳴きながら、西の方へ飛んでいく。

Burung-burung itu sambil bercicit cit-cit, terbang menuju arah barat.

3.ぱらぱら降って来た雨の中に、あなたの姿を探したんです。

Dalam rintik-rintik hujan, saya mencari kamu.

4.運転手はあの木の下に車を止めて、ぐーぐーいびきをかいて寝ている。

Sopir itu memarkir mobil dibawah pohon dan tidur sambil ngorok kroo-kroo.

5. わんわん、わんわんとこんな時間に犬の鳴き声が何回も聞こえる。うりさいな。
Guk-guk, guk-guk pada jam seperti ini kedengaran suara anjing menggonggong. Beri sik.

6. にゃーにゃーとあの猫の子たちは母親を探しながら、泣き声を出している。
Meong-meong anak kucing itu sambil mencari induknya terus mengeong.

7. 電車で時々 うふうふ という笑い声が耳に聞きこえてくる。
Didalam kereta kadang-kadang terdengar suara tertawa hi..hi..

8. あの男の子、ちょっと押しただけなのに、うわーんと爆弾のように泣き出した。
Anak laki-laki itu sedikit saja diganggu, langsung hua-hua nangis seperti suara ledakan bom.

9. かんかんと教会から鐘の音が聞こえました。
Ten-ten terdengar suara genta dari gereja.

10. 何ですかね、あの子は、友達とけんかしたぐらいで おいおい 泣いて帰ってきた。
Kenapa yah anak ini, cuma bertengkar dengan-teman saja pulang selalu sambil nangis hua-hua.

11. その瞬間、あのバスは どすんと僕の乗っていたバスにぶつかった。
Dalam waktu sekejap brak! bis itu menabrak bis yang saya naiki.

12. 風が過ぎると枝に残った葉が かさかさと音をたてる。
Begitu angin bertiup, daun-daun yang tersisa didahan mengeluarkan suara gemerisik.

以上、擬声語と擬態語の例文をインドネシア語で翻訳してみたがレポートの枚数の限りがあるので、以上の例文は代表的な例文を取り上げたものである。

四 結論

日本語の擬声語と擬態語をインドネシア語で翻訳してみたら、次の結果が出て来まし

た。

1. 擬態語をインドネシア語で翻訳したら、できないものができるものより多い。
2. 逆に擬声語をインドネシア語で翻訳したら、大体できる。できないものはほとんどありません。
3. 1、2の場合、インドネシア語の擬声語・擬態語で翻訳でできるものは非常に少ない。

つまり、インドネシア語は日本語と比べて擬声語・擬態語が全体に非常に少ない言語であるということが明らかになった。

それはなぜか。日本語は例えば「歩く」「降る」という動詞の場合漠然とした意味しかもっていない。だからてくてく歩く、すたすた歩く、とことこ歩くそしてざーざー降りに、ぱらぱら降って来た、ぼつぼつと降る、しとしと降るというようなちがいを表す擬声語・擬態語は有用である。逆にインドネシア語の場合は擬声語・擬態語の言葉はあまり必要がない。つまり、インドネシア語の動詞は、例えば「歩く」にはberjinjit, merangkakなどの細かい区別があり、「降る」を表す動詞はざーざー降りにはインドネシア語はlebat, そしてぼつぼつ降るのはインドネシア語ではgerimisという言葉で言い分けるである。

「二」の部分に言ったように言語の違いの生まれた原因は結局環境の影響であり、日本とインドネシアの環境が非常に違い、それにつれてものに対しての考え方も、日本人とインドネシア人は違います。いわば、文化の違いがあるので、日本人とインドネシア人の言葉にも影響があります。結局擬声語・擬態語の有無の違いは文化の違いということになると思いました。

最後に、浅野鶴子の「擬音語・擬態語辞典」によれば「日本語の音節の組織が単純でリズムの変化に乏しい。それを補うために、擬声語・擬態語が発達した」というような意見があり、これについても今度よく日本語の研究してから考えてみたいと思います。

参考文献

1. 大坪併治 「擬声語の研究」 (1989)
2. 五味太郎 「日本語擬態語辞典」 (1989)
3. 成美堂 「現代言語学辞典」 (1987)
4. 「日本文法大辞典」
5. 浅野鶴子 「びょんびょん擬音語・擬態語辞典」 (1990)
6. 宮地裕 「擬声語・擬態語の形態論小考」 (国語学 115号)
7. 日向茂男 「マンガの擬声語・擬態語」 (日本語学 7号)
8. 堀井令似和「日本語擬音語の言語学」 (日本語学 7号)